

大会長挨拶

日本放射線影響学会第51回大会を平成20年11月19日(水)から11月21日(金)までの3日間にわたり、北九州国際会議場において開催させて頂くことになりました。北九州での開催は、平成元年(1989)の第32回大会(土屋武彦先生)以来、19年ぶりの開催となります。

放射線・原子力の利用により人類は大きな恩恵に浴しております。特に、わが国では多くのエネルギーを原子力に頼らざるを得ない現実とともに、医療はもとより、さまざまな分野で放射線の力を高度に利用しております。しかし、放射線といえば、ただただ恐ろしいものであるとのイメージを持っている人が少なからずおられることも間違いありません。原子力や放射線に関する正しい知識をもって、その利用についても正当な判断ができるように、放射線のあるがままの姿をもっとよく知ってもらう必要があります。本大会には、日本全国より多数の会員が参加しております。会員が一堂に会し、それぞれの研究成果を発表し論議をつくることは、研究の向上のみならず、ひいては一般の人々に対して放射線・原子力の利用、ならびに放射線の影響に関する正しい理解の高揚にもつながるものと確信しております。

本大会での学術発表に関しましては、基本的には従来通りであります。一般発表は可能な限り示説(ポスター)形式で行うことにより多くの会員に見聞きして頂くようにしました。シンポジウム・ワークショップは公募によりトピックスを募集しましたが、会員各位から多くの提案・推薦等を頂き、ご覧のような盛りだくさんの内容となりました。更に、「放射線細胞遺伝学の源流・変遷・論争と展望」のテーマで特別講演を、「日本人の健康と放射線～進歩する放射線診断・治療～」の主テーマで市民公開講座を企画させて頂きました。この機会に基礎的研究から医療にわたり幅広く触れて頂き、会員の皆様方の活発な議論を通じて充実した大会にして頂けますようお願い申し上げます。

最後に、学会長始め多くの学会関係者と大会実行委員会委員の御協力と熱意に深く感謝致します。また、大会開催の趣旨にご賛同いただき、格別のご支援を賜りました各位に厚く御礼申し上げます。

日本放射線影響学会第51回大会

大会長 法村 俊之

産業医科大学